

助成年度：平成 24 年度

[所属] 雪国野生動物研究会

[役職]

[氏名] 江成 はるか

[課題]

多雪地に生息する哺乳類の生息地保全を目的とした森林利用評価

[内容]

本研究は、針葉樹人工林の哺乳類相を評価することを目的として、2012年10月から2013年10月にかけて、若齢スギ人工林、壮齢スギ人工林、広葉樹一次林、広葉樹二次林にそれぞれ自動撮影カメラを設置した。評価対象種は、ツキノワグマ、ニホンカモシカ、ニホンザル、トウホクノウサギ、ホンドタヌキ、キテンの6種とした。その結果、哺乳類種の多様度は壮齢スギ人工林が最も低く、それ以外の植生では高かった。また、各林相における哺乳類種の撮影頻度から、哺乳類種ごとに森林利用タイプをクラスター分析によって区分した。その結果、哺乳類種の森林利用タイプは、広葉樹一次林利用タイプ（タヌキ）、広葉樹林利用タイプ（クマ）、攪乱地利用タイプ（ノウサギ・サル・カモシカ）、若齢人工林利用タイプ（テン）の4つに分類された。また、これら哺乳類種の餌資源となる樹木の胸高断面積合計についても調査した。その結果、液果結実種は広葉樹二次林、若齢スギ人工林、壮齢スギ人工林で多く生育し、堅果結実種は壮齢スギ人工林にはほとんど生育していなかった。以上の結果から、当該地域において若齢針葉樹人工林は、非積雪期においても中・大型哺乳類にとって低質な生息地とは限らないことが明らかとなった。これは、人工林施業という人為的攪乱があることと、冬の降雪による植栽木への雪害によって人工林が攪乱を受けるため、野生動物が好む餌資源である液果（遷移初期種）が針葉樹人工林においても多く生育できることが、影響していると考えられる。